

なぜ日本に「天皇」という文化が生まれ育ったのか

5月1日、新天皇陛下、第126代天皇徳仁(今上天皇59歳)が即位され、「令和」の時代が幕を開けました。大化以降248番目。即位に関する数々の厳かな儀式を目にして、改めて日本における天皇の存在の大きさに思いを巡らせた人も多いのではないのでしょうか？

建築家で、文化論に関する多数の著書で知られる名古屋工業大学名誉教授・若山滋氏は、「日本の天皇制は他国の王制とは異なる性質をもっている」と指摘します。なぜ、日本には世界に稀な「天皇」という文化が存在しているのでしょうか。若山氏が独自の「文化力学」的な視点から論じます。

平成から令和への感慨

平成から令和へと替わるに当たって、上皇、上皇后の、世界の平和を祈り国民の哀しみに寄り添う姿勢が印象に残った。

戦後、急進的に民主主義を求める革新陣営に対して、天皇制は保守的な思想の上に存続したが、現在では、保守陣営がパワー・ポリティクスに傾斜する中で、あくまで平和を祈る天皇の姿勢は、むしろ革新に近い印象を与える。ジョセフ・ナイの唱える「ソフトパワー」というべきか。現在の天皇は政治とは切り離された象徴ではあるが、逆にそのことによって不思議な政治力をもちつつあるように思える。この「天皇」という、世界にも稀な文化が、なぜこの国の風土に生まれ育ったのであろうか。

天皇文化——保留民主制

かつて三島由紀夫が『文化防衛論』という本を書いて、興味深く読んだのだが、三島にとって、日本文化とはそのまま天皇のことであった。もちろん僕は、科学的な思考を基本とする理系の人間として、文化というものをより広範囲にとらえているが、天皇という象徴が日本文化の大きな部分に及んでいることは認めざるをえない。この「天皇文化」について客観的に考えることは、日本の文化論者として避けることのできないことのように思えるのだ。

世界に王制を抱える国家は少なくない。先進国では北ヨーロッパに集中し、それ以外では中東が目立つ。これをどう理解すべきか。

近代ヨーロッパでは、フランス革命、それに続くナポレオン戦争、プロイセンドイツの戦争(普墺戦争、普仏戦争、第一次・第二次世界大戦)、ロシア革命が、各国の社会体制を変革する大事件であったが、北ヨーロッパはこの影響をさほど受けていない。また中東では、植民地支配からの独立に際して多様なアラブ民族の首長がそれぞれ国家を形成した。古い王政に対する革命と国民投票による大統領制を完全な民主制であるとするならば、いずれもある種の「保留」をしているのだ。その意味で日本もまた王制を維持する「保留民主制」なのである。

しかし日本の天皇制は、こういった他国の王制とはまた異なる性質をもっている。



ユーラシアの帯——別荘の別荘

幅広く建築から、日本文化の位置づけを考える。

16世紀以後にヨーロッパ諸国が植民地につくったものと近代建築(モダニズム)は別にして、世界の高度化し複雑化した建築様式(主として宗教建築)は、ユーラシア大陸の西から東へと延びる細い帯状の地域(アフリカ大陸北岸を含む)に集中していることは前に述べた*1。これが人類の文明を育んだ「文化交流の帯」である。

この「ユーラシアの帯」には、西と東に建築様式分布における中心域が認められる。西の中心は「地中海」という海である。東の中心は「黄河と長江」という二つの大河の流域で、中国のいわゆる中原である。

「西の地中海文化」における宗教建築は石造で、その様式分布はアルファベットという音の記号としての文字体系の分布と相関が深い。メソポタミアとエジプトを淵源として、インド文化もペルシャ(イラン)文化も巻き込んで、ギリシャ、ローマ、イスラム世界、そしてヨーロッパへと、ダイナミック(動的)に発展し「大きな文化圏」を形成した。16世紀以後は西欧海洋国をつうじて植民地へと拡大し、19世紀以後は近代文明として全世界に広がり、現代のグローバリズムにつながっている。いわば文明のメインストリームだ。

「東の黄河長江文化」における宗教建築は木造で、漢字という表意文字をもつ「小さな文化圏」を形成した。動乱はあっても文化的本質はあまり変化しない、比較的スタティック(静的)なものであり、変化の激しいメインストリームから見れば、どこか別荘的な文明であった。

日本は、この「ユーラシアの帯」の東端であり、「黄河長江文化」から海を隔てて位置する。ユーラシア西端のイギリスに似ているが、イギリスはヨーロッパ大陸に近く「はなれ」のようなものだが、日本はもう少し離れた別荘のようなものだ。つまり世界の文化地理において、二重の意味で別荘的な文化なのだ。この東端の列島という位置性が、天皇という独特の文化を生んだ。